

自己についての考察——依存症の事例を通して

滝口直子

自己についての混乱——自己とはなにか	三
ディープ・プレー——彼岸へののめり込み	七
コントロールの錯覚	四
依存症者の他者との関係	六
共依存者のコントロールの錯覚	〇
自己回復へ——自助会（12のステップ・プログラム）のやり方によって	二
依存症者・共依存者の責任	三
自己の語りの場、自己の形成の場	五
自己の単独性、自己の普遍性	七
自助会の宗教性（靈性）——仲間を通しての回復	七
消費社会と欲望と依存症	元
社会的地位の不安定さ——自己防衛のストラテジーとしての依存症と現代社会	〇
自己は存在するのか、自己は自由で自律しているだろうか	三

私が存在し、私に同一性があると、私が信じている根拠は何だろう。私のパスポート、印鑑を押した契約書、戸籍、預金通帳？ とどのつまり、私の外側に在るモノである。外在するモノによってしか、私の歴史的連続性を証拠づけられないとしたら、私という自己は、この世に自律してあるのだろうか。

ポストモダニストは、自律性、同一性、自己コントロールといった近代的自己の基本的特質を、放棄するかにみえる。ポストモダニストにとってのセルフとは、流動的で、拘束されないもの、断片的なものである。より確固とした構造をもった、単一のセルフは否定され、その多様性が賞賛される。健全、強固、統一といったことはでセルフを語ることは、拒否され、セルフに歴史性は付与されない (Class 1993)。

このようなセルフの特徴を具現するかのような自己の在り方がある。酒あるいは薬物、賭博などに憑かれたごとくのめりこみ、酔い (ファンタジー) に自分を浸食されつくしたかにみえる人たち、こういった人を我々は、依存症者 (アディクト) と呼ぶ^①。酒が自己をのっとった状態をみると、あるいはほんの数日前の苦しみ (お金の使い込みが暴露され周囲に即座の返済を迫られるとか) は、自分のことではなかったのごとく、また賭博にはしる姿をみると、「自己同一性は必要だ」と主張したくなる。自己を喪失した依存症者をかばい、うそを信じ、尻拭いし続ける人たちがいる。彼 (女) らは、依存症者とすり代わってしまったかのように、自分をなくしている。「自己の自律は必要だ」とさらに声を大きくしたくなる。

自己についての混乱——自己とはなにか

ところで上記の短い文章のなかで、私は自己という言葉を何度か使っている。しかしそもそも自己とは、曖昧

な言葉である。この言葉はスピロ (Spiro 1933: 114) によると、次のように使われてきたという。(1) 生物的、心理的、文化的特性からなる構成要素の一まとまりを含む、人。(2) 人についての文化的概念。(3) 純粹自我、超越的
自我、魂などと呼ばれる、人のなかの心的構造あるいは存在についての文化的概念。(4) 自分の感覚や知覚、感情
などの中心的存在についての、自分の解釈。(5) それぞれの人に独特の、認知の方向性や知覚のセット、動機、傾
向のコンフィギュレーション (統一性)、性格。(6) 自分が他者とは異なり、他者とは別個の存在であるという自
覚。(7) 自分が、意識的あるいは無意識に知っている自分についての特性の心的表象、すなわち自己表象、などな
どである。

自己をイメージとして、(隠喩的に) 理解しようとする試みもある。その一つに、自己はモジュール(あるいは
コンプレックスやそのようなもの) からなりたっており、モジュールはモジュール自体からなりたつとする見解
がある。自己自体は一つのモジュール(例えば、家族システムのなかの一つ) であり、より高度のモジュール(例
えば家族) は、より大きな社会システムの一つのモジュールである。すべてのシステムは、同時に下位あるいは
上位システムになることができるので、ある水準でのシステムは、別の水準では下位システムかもしれないし、
さらに異なる水準では上位システムかもしれない。したがって、観点により、自己の統一は、現実かもしれない
し錯覚かもしれない。意識の遊離は、下位システムの矛盾の現われである。下位システムの矛盾が顕在化し我々
の注意を引くようになると、我々が一つのシステムとみていたものが、突如として下位システムとなり、以前の
システムの水準は錯覚のようにみえる。すなわち自己は、旧ソ連のようなものかもしれない (Erdelyi 1994: 7-8)。
自己をジッパー (チャック) で自己以外のものから仕切られた存在とする隠喩もある。この隠喩によるとジッ

パーが外側についている人は、自己と他者の境界に問題がある（時には境界が欠如している）ために、他者に侵されやすい。他者が自己のジッパーを開けて中味をとりだしたとしても、他者のいいなりになってしまう。また自分を「満たして」くれる誰か（何か）を、常に探すことになる。これとは対照的にジッパーが内側にある人は、他者に対し危険と感じた場合には、ジッパーを閉じて、「ノー」と言うことがびびる（Fossum & Mason 1989: 70-80）。

西洋の自己、非西洋の自己といった文化差の問題をもちだすと、状況はますます混沌としてくる。自立した、他者との境界が明確な、自我中心的な、西洋的自己に対ししばしば、非西洋的自己は社会中心で他者との境界が流動的、相互依存的と論じられる。しかし他者と自己の境界の問題一つを取り上げても、そこには大いなる混乱が生じている。アメリカの精神衛生にかかわる人たちが、自己と他者の境界の不在を病理と捉える場合（こういった捉え方は時には文化差を考慮していないと批判される）、例えば子供の性的虐待といった境界侵犯を念頭においている。自己と他者の境界が流動的といっても、こういった境界侵犯が非西洋社会でその文化に適合した正常な行為とみられるとは、とても思えない。別の例をあげるなら、最近のアメリカで多くの人を魅了した概念に、共依存というものがある。共依存者は自己と他者との境界に問題があるため、例えば配偶者が賭博者の借金を払うといった、配偶者の責任を取り上げ自分がそれを背負いこむような、境界侵犯を犯してしまう。アメリカ人の九六％は共依存者であるという説もある（Schaeff 1987）。九六％という数字の妥当性はともかく、自己と他者の境界の曖昧さを扱った書籍の多くが、アメリカでベストセラーとなっていることを、我々はどう考えるべきであろうか^③。では自我中心ではなく、社会中心（集団的）であるはずの非西洋の自己は、どうであろう。日本の事

例をあげよう。依存症の配偶者をもった家族の会などで、「誰にも、もちろん親、兄弟にも話せない、ここ以外誰も話す相手も場所もない」、「私にだけ荷物を押し付けてと思って、私はいまままであの人のキョウダイを恨んでいた」といった「孤独な」嘆きを聞いた人なら、日本人の自己の在り方が集団的と思うだろうか。

ゴールドシュミット (Goldschmidt 1995) の指摘するように、自己という実存しないものを定義しようとするところから、この混乱は生じるのであろう。しかしそれ（ここではひとまずそれと呼ぶ）は、人間や文化にとって重要な領域であり、それを扱う場合、イメージで捉えたり言語化せざる得ない。ゴールドシュミットによると、それはプロセスであり、我々すべては、象徴的自己をもつといえる。この象徴的自己はコミュニティの（想像上の）同意（他者の態度や反応）によりつくられるものである。もっとも、「我々は一体になのか」とは、自分自身に対しても他者に対しても、常に流動的なプロセスである。したがってこのもつとも身近で重要な概念をつねに再定義することに、人は生涯を費やしているといえる（1995: 248）。

ここで他者ということに、注目してみたい。相互作用論の創始者ともいべきミード (G. H. Mead) は、「個人は、彼の社会集団の他の成員の自己 (selves) との関係においてのみ自己 (self) をもつ。そして彼の自己の構造は、この社会集団に属する他のいかなる人の自己の構造と同様に、彼が所属するこの社会集団の一般的行動パターンを表現し反映している」(1934: 163-164)、という。よく知られるようにミードは、自己を I と me の対話と考える。我々の individuality は I から生じるものであり、me はコミュニティのなかの他者の態度である。ミードにとって自己の本質はその再帰性 (reflexivity) にあり、それは異なった（他者の）視点から経験をみることなのである (Athens 1995 等参照)。

そこでここではひとまず、自己を、内省を通し語られ、つくられるもの、そしてそれは自己とモノが一体となった閉鎖的關係（目を閉ざした融合）に他者の視点が導入された時に、存在しうるものと考え、論を進めていく。この見解は、当然、自己を固定したものとは見ていない。

先に述べたように我々は日常生活のなかで直観的に、「あの人には自分がない」などということがある。アルコール依存症者には、「あなたは酒で自分を失っている」というかもしれない。依存症者の行動に振り回されている配偶者には、「あなたはダンナ（奥さん）のことはもういいから、自分の人生を取り戻しなさい」というだろう。我々はこういった人には自分（自己）がないと、判断するのだ。依存症は自己喪失のやまいである。ここでは依存症者の自己喪失を通して浮かび上がる、自己の問題を考えてみたい。そして自己——それが文化や集団のなかでいかに形成されるものであるにしろ——は必要であり、自己には自由（自律性）と連続性（同一性）、普遍性があることをも、示唆したい。^④

ディープ・プレー——彼岸へののめり込み

昔から飲む・打つ・買うはアソビの代名詞であり、身を破滅させる行為と受け取られてきた。妻子をたたき売ってでも飲む男、博打がすぎて勘当された若旦那、巨万の富を吉原で使い果たした豪商——時代劇でよくでてきそうな男たちだ。現代では、こういった遊びにはまりこんだ人（男女を問わず）は疾患を患っているとみなす。彼（女）らはアルコール依存症者であり、病的（強迫的）賭博者であり、おそらく男性・女性（あるいはセックス）依存症者であろう。こういった人たちは憑カレタごとくにコントロールできない衝動にかられ、アルコール

や賭博といった依存対象にはまりこんでいく。

遊びと依存症

遊びは、本来楽しい、日常生活から切り離された経験、もう一つの現実のはずである。ここでは社会的身分が消失し、みな単に遊ぶ人となり、現実の批評が許され、大いなる自由も許容される。しかし現実に戻った時、遊びの結末が苦しみや痛みをもたらすこともある。著名な文化人類学者クリフォード・ギアーツがディーブ・プレーと呼ぶ遊びであり、その典型例が、賭けるもの（金、地位など）の高すぎる賭博である。ここでは賭博を例にとり、依存症者が遊びと現実の境界を、往来できなくなるさまをみていく。

ロジェ・カイヨワの遊びの分類を参考にするならば、賭けは偶然、めまい、競争といった要素を含む、複雑な遊びである。ルーレットやスロットマシン、さいころは偶然によってのみ支配される遊びのようにみえる。しかし遊び手は、勝利の女神への祈り、勝った時着ていた衣服の着用、お守りといった呪術的方法を用いて、偶然（カオス）に挑戦し、偶然（運）をコントロールしようとする。パチンコをしている時には火（ライターの）を借りない、髭をそらないといったタブーを守っている遊び手もいれば、肩越しに覗かれるのを、極端に嫌う人もいる。競馬やスポーツのように予測可能な賭けとなると、驚くほど複雑なシステムをあみだすことにエネルギーを費やす。ポーカーやマージャンのような技術のいるものとなると、まさに勝負である。スロットマシンやブラックジャックでも、遊び手はハウス（胴元）を打ち負かしたのである。賭博とは、きわめて力に囚われた遊びといえよう。

アンリオの指摘するように、「偶然の『遊び』とは、人が……偶然《とともに》遊ぶ遊びである。彼はされるままに満足するのではなく、自分でするのだ……偶然《とともに》遊ぶとは、偶然《に對抗して》遊ぶことである。人は運を『ためす』のであり、適切な手段を講じて敵を『手玉にとり「遊び」』、征服する」（アンリオ 1986:112）のである。

そして賭博には、めまいがある。アドレナリンが体中を駆け巡るような、手に汗握るスリルと興奮がある。「自分の読みがあたったというあの快感、セックスよりもずっといい。」多くの賭博者が、賭博中の興奮をセックスやドラッグによるハイに例えるし、多くがトランス体験を報告する。まさにアクションに身をおき、勝利に酔いしれるのだ。しかし負けたからといって、それが酔いをもたらさないわけではない。「賭博の帝王」と呼ばれたニック・ザ・グリークのいうように、「人生で一番いいのは、賭けて勝つこと、次にいいのは賭けて負けること」である。賭博の醍醐味は、運と自分のよみ（知識やわざ、直感）で偶然に挑戦し、その興奮に酔いしれることである。そしてここにも、めまいを支配しようとする、遊び手の意志がみられる。「めまいに心身をまかせることではなく、それを支配すること……大切なのは……戦い、征服することだ」（グランジュアン 1963、アンリオ 1986:114に引用）。

賭博という遊びは、人間の及ばぬものへの挑戦、コントロールの試みであり、きわめて人間的な遊びといえよう。さらにカオスにシステムを見出そうとする試み、未知のものを既知のものに変えようとする試みであり、占いととの共通性を見出すことができる。

賭博にはまりこんだ人は、そのコントロールを失った人である。もう一つの世界、彼岸に行ってしまった人で

ある、境界を自由自在には往来できなくなった人である。病的賭博者には、コントロールを失ったことへの強い恥がみられるし、失っていないという、非現実的なほどに強いコントロールの錯覚、精神分析の用語を使うなら否認がみられる。だからこそ嘘をつくのである。

憑きものと空虚感

賭博者はツカレタごとくに賭博に耽溺する。スロットマシンの前に座り、両手届く範囲すべてのマシンに次々にコインを投げ込んでいる人もいれば、一週間でも、ほとんど不眠不休、飲まず食わずで生理的欲求をかうじて満たすだけで、カードにふける人もいる。顔色は青ざめ、生気なくゾンビーのようである。一昔前まで、我々の社会には憑キモノという概念があった。何か自分以外のモノ（非自己）にとりつかれ、自分ではコントロールできない、はたからみると異常な行動をとるのである。モノは霊であろうとキツネであろうと、超自然の力をもっているのだから、自分の力が及ぶはずがない。現在でも賭博者やアルコール依存症者の家族が、「ふわふわと、ばけものみたいで、私の子供と違う」とか「自分で悪魔でも呼び寄せてるのかなあ」、「あれはツキモノ」と評することがある。賭博者は自分のコントロールできない強い衝動につかれ、賭博を続けるのである。憑かれた自己は、はたからみると非自己となる。もっとも本人はそれを意識していない。覚めると記憶は——他の意識遊離と同じく——おぼろげなことが多い。自己があれば、憑きものが去った後——後知恵ではあるが——「ちょっとめをはずしすぎた」、「自分でなくなっていた」といった想起、自覚が生じるかもしれない。そして「自分を取り戻した」ことでほっとするかもしれない。自己が憑きものに浸食されていると、憑きものが去ったとしても、

後には空虚しかない。(多くの病的賭博者がするように)この空虚感を「埋める」には、憑きものを呼び込むしかないだろう。

この世における自己の不在

このように依存症者はこの世ともう一つの世を行き来しながら、生きている。しかし随意の往来はしだいに困難となり、もう一つの世界が際限なく拡大し、現実を締め出してしまう。デンジン(Denzin 1986)はアルコール依存症を、「時間」のやまいと捉えるが、彼(女)らは人間の手におえない時の流れを、酔いという手段でコントロールしようとしているのかもしれない。この世では、いまはあつというまに過去になっていく。ある依存症者がいうように、もう一つの世では、時間の流れを止めることもできる。^⑤

飲む時は、時間を止めるんだ。時計をみると……それは午後一〇時三〇分だという。ウィスキーを一杯飲んで、頭のなかが、飛んでしまう。何年も前に戻ったり、今から十年先になったり……まだ一〇時三五分じゃないか。(Denzin 1986: 113)

これは案外、永遠のいまを保つに、「うまいやり方」ではないだろうか。

依存症者がもう一つの世界を選ぶのは、論理的なようにも思える。「パスカルの賭け」と呼ばれる有名な賭けがある(Jordan 1994)。この賭けで、パスカルは神の存在を信じることは、論理的だとする。神がいるとしたら、神を信じその意にそって生活を送れば(この世での限定されたコスト)、あの世での至福が約束される(無限の報酬)。神がいなかったら、神を信じても損失はもたらされない。この二つを比べるなら、信じる方が、論理的で

ある。酒や賭博がエクスタシーをもたらししてくれる魔法のランプなら、酒や賭博を信じる方に賭けたほうが、得ではないだろうか。

もしおまえさん、信じるなら、ばかなことじゃなくなるんだ。もし本当に信じるなら、大当りするってね、愚かなことじゃないんだ……おそかれはやかれ、大当りするって信じたんだよ。(Lesieur 1984: 34)

そして（少なくとも当初は）その賭けは、ある賭博者のいうように、報われるのである。

あのスリルがたまらないんだ。マリリン・モンローと愛しあっているみたいなんだ。(Lesieur 1984: 44)

さらに酔いは、望ましい人格に自分を変えてくれる。酔いは自分を、大物、「男」なみにしてくれ、「素面状態で得られるのより正しい精神のありさまを（部分的・主観的に）もたらししてくれる」(Bateson 1990: 491)。

博士論文を書くのが怖いんだ……不安が僕を襲ってきて。立ち上がってスコッチを一杯ついで、飲む。不安はどこかに行ってしまう。書く勇氣と力が湧いてくるんだ。(Denzin 1993: 76)

博打は俺を興奮させ、切れ者にしてくれる。さいころのテーブルにいくと何千ドルもの金が、さいころのひとふりで、動いている……これは俺のための場所だと思ったんだ。(Custer & Mill 1985: 85-86)

ついに男と対等になったのよ。どんと座って、男と対等にうつの。賭けでは負けてはいないわ。(Lesieur & Blume 1991: 191)

しかし残念ながら身体や物理的状況は有限であり、無限の酔いには耐えられない。身体がボロボロになるだろう、あるいは多重債務で脅しにびくびくしながら暮らすことになるだろう。しかも依存症者のエクスタシーは、自己を解放し自由にするもの、生の源とはならず、孤立化させ束縛するものとなるのである。

六時半からは、賭けをするんだ……二つの異なったチャンネルで二つスポーツがある日はいつでも、二つテレビをつけとくんた……ラジオのイアホーンをつけて、もう一つの耳にもね。四つ全部を聞いて……家にも心をはるかかなただよ……「ここから出ていけ。試合を聞いてるんだ。」子供はうるさいものさ……でも俺には邪魔してるように感じるんだ。とても大事な試合なのに、テレビのまえに立って……ここから出ていってほしいんだ。(Lesieur 1984: 46)

ある夜、ラスベガスで一五万ドル負けて家に戻ると、二階でリサが気を失って床に倒れていたんだ。子供たちは泣いていた。家政婦は自宅に戻っていたし、子供たちはどうしていいか分からなかったんだ。その時俺はなにを考えたと思う。もしリサが死んだら五〇万ドルの保険金が入ると思ったんだ。(ほんの少し残っていた「まともさ」をかき集め彼はリサを病院に運んだ。そこで、リサが妊娠四カ月であり、おそらく流産するか、子供が生まれてもリサが死ぬかもしれないと、医師に告げられる。)医者の方で言っていることなど、頭に入らなかった。いつ説明が終わるんだとイライラしてたんだ。とにかく大金を賭けた試合の結果を、ノミ屋に確かめたくってね。(Custer & Mill 1985: 56)

依存症者がこの世に戻ったとしても、そこに在るのは、耐えられないほどの重荷、空虚である。それは、酔いの結末(離婚、失職、借金、入院)がもたらしたものかもしれない。もともとの空虚感を癒すため、そこに酒をそそぎこみ、あるいはそれを賭博で埋め合わせたのかもしれない。原因、結果の関係はどうあれ、酔いという防壁なしに、素手で、言い表しようのない重荷(敵)と立ち向かうのである。酔いの間にこの世で失ってしまったもの、この世では取り戻せない過去へのリゼントメント(恨み、自責の念)、未来への恐怖から、彼(女)らはこ

の世で、いまを生きることが難しくなる。この世での居場所のなさ、言葉で表現しがたいものであり、痛みや圧迫感を通して依存症者を襲うものとなる。「苦しい」、「俺のような不幸な人間は、世界に二人としない」、「もう充分罰は受けてるのに」、「周りには私の苦しみは分からない」、「他の人は幸せなのに」、などなどと自分を哀れみながら、彼（女）らは、またもう一つの世界に戻らざるえない。パスカルの賭けの報酬は、あの世で受け取るべきものなのだ。

こういったもう一つの世界にいったきりの人、酒や賭博に憑かれた人を、意志が弱いと周囲は非難する。依存症は、意志の強弱とは関係のない疾患であると医者やソーシャル・ワーカーは家族を説得する。とはいえ、実際に巻き込まれ大変な苦しみを被っている周りの人間は、「でも大人なら、もっと責任もって行動するわよ」と言いなくなる。「意志が強ければ、賭博を止められるはずなのに……」、「やる気がないのよ……」、「根性が悪い……」。近代社会では、自己の行動に責任をとれるのが大人なのだから。

コントロールの錯覚

「私は飲まない……」、「それとも私は飲むのだろうか。どちらにしろメスカルは飲まない。」「もちろん、飲まないとも。ボトルはあそこにあるんだ。あの藪の後ろに。拾えばいいんだ。」「嫌、私にはできない。」「……」そうだ。たった一杯だけだ。必要だし、癒しのため一杯だ。多分二杯。」「……」「神よ、神よ、キリストよ。」「おまえさん、たいしたことないって言えばいい。」「その通り、あれはメスカルじゃないんだ。」「もちろんだよ、それはテキーラさ。もう一杯飲んでいいよ。」「ありがとう。そうするよ。」

これは、アルコール依存症を主人公とした、M・ロウリーの小説 *Under the Volcano* の一節である(Lowry 1971: 126-127)。ここで主人公のなかの飲まない自己と、それを欺き、飲ませようとする自己とが葛藤した結果、神に祈ったにもかかわらず、主人公はボトルを口に引き寄せてしまう。彼(女)らは自分の意志の強さ、コントロール能力の限界を何度も試す。

領事「主人公」は自分の酒に手を触れていなかった。「人間の意志は、征服されえないものだ。」(Lowry 1971: 205)

そして何度も失敗するのである。ある賭博者によると、「同じことをやれば、同じ結果になる。それでも何度も試すんだから、あきれたもんだ。」Bateson (1990)の言葉によると、「わが魂の指令官』になれると、少なくともそれがあべき姿だと、信じている……裏切られてばかりいる—これがどうも「指令官」の実際の姿であるらしい」(425-424) ということになる。

賭博者のなかには確率そのものをコントロールしようと、複雑なシステムを発達させる人も多い。

次のシーズンをあらかじめ読むんだ。だれがチームにいるのか、だれがどういう強みをもっているのか、だれがパスはうまいか、だれがシュートはうまいか……。当日の夜、だれかぬけてないか、十分研究するのさ。……情報を分類して、勝負が五分五分なのはのけて、すべての試合のオッズ(ライン)を自分で考えるのさ。その夜、一〇〇試合があるなら、自分で考えたシステムを使って、一〇〇のオッズを考えるのさ。どのチームが何点かを計算して……おまえさん、仕事は計画しなきゃ、計画を実行しなきゃねえ。(Lestair 1984: 28-29)

多大なエネルギーを費やす彼らの大変な努力にもかかわらず、未知のものを既知にするという試みは、失敗する。

さいころをふれば、神が人間に勝つときまっているのだから。なんらかの要因により、依存症者は他の人と同じようには飲んだり賭けたりすることはできない。酒や賭博には勝てない、それをコントロールはできないのである。

依存症者の他者との関係

依存症者にとっての他者というと、依存を可能とするイネイブラーの存在が、まず指摘される。ここではイネイブラーについて考察するまえに、依存対象との関係を考える。例えば、アルコール依存症者は酒を最愛の恋人としているし、女性スロットマシン・プレーヤーはマシンを擬人化し、それに恋をしているともいわれる。他の人が気に入りのマシンでプレイしていると、「あれは私のモノなのに」と嫉妬心を感じるといった報告もされている（Schull 1996）。男性賭博者も勝ちを（運命の女神から）愛されることと同価値と受けとめ、しばしばセックスにたとえその興奮を語る（Lestier 1984等）。依存対象は、自己に快楽をもたらすべきモノであり、だからこそ自分の支配下におかねばならないモノとなる。しかしこのモノは単なる物理的モノ、化学物質やカード、マシンではない。ヒトになりうるからこそ、依存症者の自己深く侵入し、依存症者を支配するようになるのだ。

依存症者はもう一つの世界に耽溺しているのだから、依存の燃料を提供し代わりに社会的責任を負ってくれるイネイブラーなしでは、この世で生きていけない。依存症者は他者（配偶者、両親、恋人など）の良心や罪悪感を操作し、殉教者、世話役といったイネイブラーの役割にはめこむ。

俺は、おかしいのは妻のほうだと妻に信じこませたのさ。妻はボトルを隠して、中の酒を捨ててしまったん

だ。隠すのは俺の仕事なのに。(Denzin 1993: 78)

妻はバーボンをケースで買ったよ。俺は、イライラするから酒屋には行きたくないと言ったんだ。妻はもし酒を買って、それで俺がいい気分になるんなら、喧嘩はないだろうと思っただ……俺は酔っぱらって、間違った銘柄を買ったとかいって、妻をどなりつけたものさ。(Denzin 1993: 79)

アル(夫)の気まぐれにはまいてたわ。でもそれは仕事のストレスのせいだと思ってたのよ。時々わけの分からない電話がかかってきて、私が何を言っているのか耳をそばだてると、アルはかんかに怒ったわ……出張のとき、夫がどこにいるのか知ろうとするのは、あきらめたの。尋ねれば怒って私が探偵みいだって言うんだもの……アルが、一日中働いているんだから、夜はリラククスしてテレビを見たい、週末はゴルフに行くといっても、反対しなかったわ。(アルはラスベガスに出張し、ゴルフで賭けをしていた。)(Berman & Siegel 1992: 94)

イネイブラーは依存症であることを隠したり、飲酒や賭博をやめさせようとしていたり、依存症者の責任を代わりに果たしたり、うそを信じたり依存症者のためにうそをついたり、しくじりや借金の尻拭をしたりして、賭博や飲酒を続ける口実と機会と燃料を提供する(「おまえがうるさいから、飲まなきゃやっていけないんだ」)。イネイブラーは他者(依存症者)のなすべきことを、自分のことと思ひ込み、依存症者の身代わりを勤めるようになる。そしてそれに支配されはじめる。イネイブラーも依存症者と同じように、自分を失っていき依存症者の嗜癖に依存した、共依存者となるのである。依存症者からみると共依存者は自己の延長、付属物なのかもしれない。

依存症者と共依存者との関係を強化するのが、うそである。うそというのは、常識で考えると人間関係を断つ

ように思える。しかしこの両者の関係では、その反対の役割を果たしており、ここでうそについて考えてみたい。うそおよびうそを中心とした依存症者と共依存者の関係

依存症者はうそをつく。「二〇万円の借りがあって、どうしても明日までかえさなければならぬ。でなきゃ業務所行きだ」と共依存者を脅し、（もし借りたというのが本当なら）一〇万円だけ返済し、その残りで賭博をする。「妻のおじが亡くなって……」などといもしないおじを引き合いにだして、知人から借金をする。「賭博をしていない」と妻やセラピストに言い続け、うそがばれた時、「でも聞かれた時にはしてなかった」と開き直ったアルコール・賭博依存症者もいる。（Berman & Siegel 1992: 208, Maurer 1994 等参照）

ロウリィの小説の主人公のように、彼（女）らはまず、自分を欺くことが得意である。彼（女）らは自分が、飲酒や賭博をコントロールできない状態にあることを強く否定する（否認）。それは、酒や賭博は自分に力をもたらししてくれるマジック（源）であり、それをコントロールする秘密を自分は知っている、という信条に基づいているようだ。酒や賭博をあきらめるのは、力の剝奪に等しいことだ。我々の社会では力のあることが良いことであり、だれが無力を喜ぶだろうか。もし人生が破綻しているとしたら、それは酒や賭博のせいではない。

確かに酒はよく飲んでいた……しかし、アル中になるような飲み方はしてこなかったつもりだ……女房と別れたが、不平ばかり言う女房に嫌気がさしたためで、何も酒のせいではない……仕事は四回変わったが、自分ほど上司に恵まれない人間はいないと思う（森岡 1989: 79）

賭博で負けても「たまたま負けた」のだ。違法な手段で金を入手したとしても、それは「盗んだ」のではなくちよっと「借りた」のだ。当然「勝ったら戻す」べきものなのである。

うそには、「お金を落とした」といったあからさまなものもある。もっと手のこんだものもある。例えば、お金を貸した人を協力者にしたて、賭博者の家族に「ちゃんと返済しますよ」とうそをついてもらうこともある。隠蔽のうそもあれば―借金がばれないように、自分あての郵便物を隠す、虚構のうそもある―銀行にいつて、妻名義の口座からお金をおろすのに、「妻は病気で……」と言う。意図的につくうそだとしても、「後で償うから」という自己欺瞞がその背後にある。彼（女）らは、「自分にうそをつくだけでなく、自分でうそを信じ」、周りの人に「うそをつきかえす」のである（Lowry 1971: 205）。

利害関係のない第三者は、容易にうそをみぬくかもしれない。しかし共依存者は「仕事で……に出張する」、「お金を落とした」といった単純なうそをも信じてしまう。うそを買うのである―依存症者をよりうまいうそつきにする、うそが通用すると依存症者に信じ込ませる、依存症者のコントロールの錯覚と自己欺瞞を強化させるといふ代価を払って。

なぜ共依存者や、やすやすと騙されるのだろうか。まず事実を知ることへの恐れがある。サラ金にお金は返済していない、出張した先で仕事ではなく賭博をしている、酒を飲んでいる、自宅は抵当にとられてしまいもはや借家になっているといった事実が分かったとしても、心安らぐものではない。すべて「どうにかなっている」と信じただけが、気が楽であろう。うそは、その時だけでも共依存者の、依存症者の行動をコントロールしたいという欲求を充たしてくれる。依存症者の行動は、混沌そのものではなく、「説明可能」というある種の秩序の感覚を、そのうそは共依存者に与えてくれる。

夫は、自分の行動について五つも六つも、違った話を作ってくれたわ。私はそのなから、自分の好きな話

を選んで信じてたの。しがみついたわけ。（賭博者の妻の話）

依存症者からすれば、「充たし」てやったのだから、賭博くらいしていいだろう、ということになるのかもしれない。それに相手にうまくうそを呑みこませお金を引き出すことに成功するなら、賭博者はこの勝負に勝ったことになる。うそを言う、そのうそを買うというのは、欲求充足というレベルで見ると、互いの欲求を（その時だけでも）充たすことになる。両者ともうそを言いそして信じ続けたいには、わけがあるのだ。

共依存者のコントロールの錯覚

たいていの人は、わけの分からない災いに次々に襲われると、どうにか状況をコントロールしようと試みる。カオスのなかに秩序をうちたてようとするのは、きわめて人間的な行為である。共依存者にとって（依存症者も同様だが）悲劇なのは、他のことはコントロールできたとしても、他者の嗜癖はコントロールできないことを、なかなか認めることができないことだ。嘘はおそかれはやかれ、明らかにする。共依存者は自分が混乱のただ中にあること、自分の行ったコントロールの試み（例えば、依存症者の気晴しのために、旅行する、カウンセリングを受けさせる）が失敗したことを認めざるえない。しかし力のないということは、自分の能力への侮辱と感じられる。なんとか方法はないものかと、（カウンセリングも含め）あれこれ試してみる。うそを買う。そして深追いしていく。「同じことをやれば同じ結果になるのに、違った結果になると思って、何度も何度も繰り返し。あきらめたものだ。」

皮肉なことに、依存症者、共依存者ともに、近代的人間の特質と思いついてきた「コントロール力」という

信条をあきらめきれずに、自己を失っていくのである。依存症者は酒や賭博に支配され、共依存者は依存症者の嗜癖に支配され。

自己回復へ——自助会（12のステップ・プログラム）のやり方にそって^⑥

「底つき」になり、自分が酒や賭博に勝てないことが分かって依存症者は回復の一步を歩みはじめる。共依存者も、相手の嗜癖をコントロールすることを放棄して始めて、自己の回復の一步を踏み出すことができる。自助会の例会で自分の物語を語ることを通して、自己の歴史的連続性（同一性）を確認し、自己を回復していくのである。

無力の受容と偉大な力を信じること

12のステップ・プログラムによると、回復の一步として酒や賭博に対しての無力や自己の混沌を受け入れること、自分より偉大な力（ハイヤーパワー、あるいは自分の理解する神）に自己のすべてを委ねることが、必要とされる。降伏という、普通なら負の経験が、生きることへの転換点となるのだ。ベイトソン（Bateson 1990）の言うように、これは「知のあり方の変化」……『誤った』認識論からより『正しい』認識論への変化』（1990：426）である。

無力であると認めることは、自分が依存症者であること、そのラベルを受け入れることになる。それは、たとえ自分を例えばアル中と呼んでも、そのラベルを飲酒あるいは他の行為（暴力など）の正当化に用いることは、

別である。

自己の連続性の確認

いわゆる棚卸というステップで、自分の過去や欠点を振りかえる。それを自助会のメンバーの誰かに語り、欠点を取り除いてくれるよう神（ハイヤーパワー）に頼む。自分を縛りつけてきた過去の恨み、しがらみを大掃除して、始めて今を生きることになる。

大きな重荷が肩からはずれたようだった。過去がゆっくり向こうに去っていき、生まれて始めて自由になった。父親のアルコール、母親の死、私の離婚とアルコール、子供の頃性的にどうされたか、なぜ新しい異性関係にはいるといつも問題が起きるのか……目の前に新しい人生の新しい女性がいるような感じだった。

（Denzin 1993: 170）

これは、自分の過去を癒し、分離した自己（酔った自分、素面の自分）を統合させ、自分を許すとともに、なぜ（例えば、なぜ依存症になったか）という問に対し、自身に答えを示すステップである。自分がどう生きてきたのかを理解し、自己の連続性（同一性）を確認する作業といえる。ここで回復しつつある依存症者は、自分の人生の責任を引き受けたともいえよう。

他者との関係の修復

依存症者は自分の病に、周りのさまざまな人を巻き込んできたが、そういった人たちに償いをする。これまで

のステップは、ハイヤーパワーや自助会の仲間との関係が中心であり、ここで回復しつつある依存症者は、一般社会との関係を修復する。

仲間との経験と回復の共有

心の平和と落ち着きを得ても、一人ではその落ち着きを維持し高めることはできない。回復の力は集団の中で、仲間を通して、個々の依存症者に働くものである。回復しつつある依存症者はこの原則を、他の依存症者との出会いのなかで、実践していくのである。

依存症者・共依存者の責任

回復しつつある依存症者が自助会などで、その回復を賞賛されるのを見ると、「なによ、さんざん迷惑かけておいて、止めるのが当たり前じゃない。いままでのことどうしてくれるのよ」と周りは叫びたくなるかもしれない。12ステップのプログラムでは、回復の初期段階では、病気ということで、責任は一応棚上げしている。

人間が自然や生殖まで征服しそうにみえる、現代社会であるが、自分の力の及ばないことは、身近にたくさんある。その一例が、子供は生まれる状況を選べないということである。アダルト・チルドレンとか機能不全家族といった用語がいわば流行語となっているが、依存症者は依存症者の両親や祖父母もっていることも、多い。五〇人の女性の病的賭博者(アメリカの事例)のうち、父親がアルコール依存症だったのは一四人、母親がアルコール依存症であったのは五人、父親が病的賭博者だったのが一〇人、母親が病的賭博者だったのが二人、他に深刻

な問題を抱えていた（子供虐待など）が六人であったという報告もある（Lesieur & Blume 1991）。主にアメリカ人白人男性からなる別の資料によると、ボストンのある治療センターの薬物・アルコール依存の患者八三人のうち、父親に飲酒の問題があったものが五三%、薬物五・四%、賭博一六%、母親に摂食障害のあったものが五・四%であった（Gambino, Fitzgerald, Shaffer, Renner, Courtnage 1993）。日本の事例でも賭博で財産を失った父親をもつ賭博者、祖父が早く死亡したため貧しいなかほとんど一人で育った父親をもつ賭博者、アルコール依存の父親をもつ賭博者などはしばしばみられる。

世の中に完璧な親というものはない以上、我々はみな先祖の荷物をもたされて生まれてくる。中には持てそうもないくらいに重荷をもたされる人もいるだろう。家族のそれまでの問題を解決するために、その人は依存症を患っているのかもしれない。そうならざるえないよう、生まれてきたのかもしれない。

最近では依存症の生理学的メカニズムや遺伝的素因の研究にも、大きな進展がみられ、依存症を（脳・神経系統の）メタボリズムの病気、複数の遺伝子の作用による化学物質の不均衡と関連した病気とする見解が、発表されている（Blum et al. 1996, Rugele 1993, Volpicelli 1987 等）。起因となるのが生理学上の問題であれば、ますます依存症になった責任をその人に問うことは難しくなる。

とはいえ回復は、本人の責任である。そして周りの人は、本人の責任を肩代りしない責任、本人が自己の責任を引き受けることを認め受け入れる責任があろう。

自己の語りの場、自己の形成の場

タイラー (Taylor 1989: 47)、「あるいは多くの人のいうように (浅野 1994 等参照)、我々は語りにおいて、自己の意味を把握する。我々がなにもなのかの意識をもつには、我々はいかにして我々となったのか、我々はどこに
いこうとしているのかの概念をもたねばならない。「過去の記憶、感情、情緒をつなぎあわせることは、自分を現
在に位置づける一つの方法である。それは自分を想像する、そしてアイデンティティを創造する一つの方法であ
る」 (Maschio 1995: 98)。^⑦ 自助会の例会は、自己の語りの場である。自分の (酔っている間は記憶喪失していた)
過去を発掘 (想起) し、出来事と出来事をつなぎあわせ、それに意味を付与する場である。そこでは自分の物語
が、例えば (本人) 「パチンコ中毒の〇〇です」、(他のメンバー) 「ハイ! 〇〇」から始まる枠組みにそって、
今日一日、完璧より進歩、ハイヤーパワー、スリップ (再飲酒、再賭博など)、ステップ、プログラムといった伝
統的には (出席者それぞれがある程度の共通の理解をもちながらも異なった意味を付与するであろうメタフォ
ー) を用いながら、語られる。語りの内容は、自分の飲酒 (とばく) 歴、スリップ、あるいは信頼といった与え
られたテーマにそったものかもしれない。語りの内容は、自分が選択する。最後は「ありがとうございました」
で話を締めくくり、次のメンバーが、「競馬中毒の〇〇です」と始めるのである。

例会では、賭博のために会社のお金を使いこんだ、トイレにもいかず、数日間吐きながらも飲んだといった、
隠しておきたい自分、酔った自分のことが語られる。ここでは建て前、面子といった世間の社交術は、放棄され
る (とされる)。

話者は自分のことだけを語る。これは一見モノログにみえるダイアログである。話者が自分の過去を話す時、過去とはある距離をおいて、いわば他者の目で自己を内省している（Denzin 1993 参照）^⑧。依存症者と共依存者の交わす発話が、一見ダイアログにみえるものの、うそを介したモノログであるのとは、逆である。さらに話者は、出席している仲間全体に語りかけている。仲間は、その語りと自己の語りとの共通性を認識し、共感を示したり、回復の希望を強くする。他者（仲間）の過去は、自己の鏡となり、他者の回復は自己の未来となる。

依存症者の家族が、「やさしいけれど、思いやりがない」、「素直なんだけど、頑固」、「人の言うことに耳をかさない」と依存症者を評することがある。通常の言葉の意味では、素直なら頑固ではないし、頑固なら素直ではない。やさしければ、思いやりがある。思いやりがなければ、やさしくない。どうやらこの素直、やさしいとは、家族の欲求すること（言ってほしいこと）を、依存症者がすぐに満たしてくれる（言ってくれる）ことを意味しているようだ。そして頑固、思いやりのなさとは、「やめろ」と何度もいっても、嗜癖をあきらめないことだ。彼（女）らは、その場、その場で他者の欲求をあらかじめ読み、満たすのは幼少の頃から得意なのだろう。あるいは育った環境から得意にならざる得なかったかもしれない。しかし満たされたことで対立や交渉（ダイアログ）は生じず、その場は、他者は引き下がる（あるいは依存症者が他者を退ける）。他者（社会）は彼（女）らの世界に入ってこない。彼（女）らは、他者とのかわりのなか、他者（社会）を取り入れ、社会的自己をつくるという試みに、失敗したのかもしれない。したがって自分が（だれかに対し）他者となることもない。（よく依存症者は、自己中心的、ナルシステイク、精神的に未熟といわれることを思い出してほしい。依存症者が共依存者に対しかくも冷酷に金をせびり、暴言をはけるのも、共依存者が他者ではないからだろう。）その時、その場の、他者

の欲求をみただけの存在に、同一性を期待できない。自己は空虚にならざるえない。

メンバーは自助会に始めて出席した日をバースデーと呼び、三カ月、六カ月、九カ月、一年、二年といったバースデーを仲間とともに祝う。いわば例会で社会化のプロセスが進行しているのだ。依存症者は（回復した）他者をモデルとしてそれを取り入れながら、飲まない（でいられる）自己をつくっていく（Denzin 1993 参照）といえよう。

自己の単独性、自己の普遍性

たいていの依存症者は、「自分のような不幸をなめた、苦しんだ、ひどいことをやってきた（これには少し自慢も入っているかもしれない）——人はこの世にいない」と確信している。だから世界中の誰も、自分のことは絶対に理解できるはずはないのだ。しかし自助会の仲間との出会いで、自分と経験を同じくする人がたくさんいることに気づき、自分の経験は、ある普遍的パターンの一例であることを認識する。自助会の伝統的な言葉で、自分の過去と今を語る時、個人の話はその会のメンバーの物語になっていく。そして依存症者全体の物語に加わり、普遍性を付与され、自助会の伝承となっていく。

自助会の宗教性（靈性）——仲間を通しての回復

自助会は、宗教集団ではない。神を信じる人は「自分の理解する神」という言葉を用い、宗派は問わない。また無神論者は、ハイヤーパワーという言葉を使う。しかし回復のためのプログラムや一致のためのプログラムを

読むなら、デュルケーム的な意味で、これは宗教的だといえよう。まず無名性がその特徴としてあげられる。性別、社会経済的地位を問わず、ある嗜癖をもつという共通性のみで、グループができる。次にこのグループは、必要限度でしか組織化されない。だれも支配しないし、あくまで非専門的である。昔からのメンバーが、自助会のなかで専門のカウンセラーの役割を果たすことは、ない。また外部の問題にかかわることはなく、経済的にはメンバーの寄付金のみで維持される、自立、自律の集団である。

そしてなによりも、「グループの一体性」により「個人」は回復する。「仲間の中で育ててもらった」、「『仲間を通して働く』ハイヤーパワー」、「その人たち「仲間」のおかげであり、そしてそれらすべてを通じて、眼にみえない神の導きがあった」といった言葉を回復者の語りに見出すことができる（回復への道（PART II）1994, pp. 24, 46, 109）。集団―（個人を超えた）偉大な力こそ、個人に靈性を付与するものなのである。

そして個人が偉大な力を体験する場が、自助会の例会である。決まった時刻に、決まった場所で、例会は催される。まず司会者の指名により、回復のためのプログラムや一致のためのプログラムなど自助会の文献のいくつかを各メンバーが順番に読み、その後それぞれ自分のことを語る。こういった文献は、それを引き合いにしながら自分の経験を考える、参照枠みである。自分の破壊的で混乱をきわめ、無意味と思いきんでいた経験が、仲間の話や参照枠組のなかで意味あるものと変わり、意味の転換を話者や他の仲間も体験する。自分が孤独ではなく、仲間とつながっていること、そこに大きな力があることを、出席者すべてが実感するのだ。例会は、メンバーのための意味生成の儀礼である。^⑨

消費社会と欲望と依存症

「徹底的に裏目にでた、われが酒」(AA Grapevine 1977, 11月号)というように、依存症は、いいと教えられてきたことを、徹底した結果、裏目にでた病気である。欲求のコントロール、印象操作、力の獲得・誇示、頑張り、気配り—こういったことは、資本主義社会で成功のために必要とされる。相手の気持ちを読み言われる前に充たすことは、「気がきく」と評され、これは日本社会では美德であるし、アメリカにおいても女性に期待された感情術である。依存症者も共依存者もこういった価値観を徹底して行動化した結果、深淵に陥るのである。ラッシュェ(Lasch 1979: 26)の指摘するように、社会問題は、家族あるいは個人の経験のなかに映しだされる。依存症は、きつと一つの世にもあったであろうが、近代的思考や資本主義の歪を拡大したやまいともいえる。

消費社会は、一見我々に多くの選ぶ自由を与えてくれたかのような。生き方の多様性、オルタナティブといった言葉は個人が、(豊かな社会に住んでいる限りだが)自由に、平等に、さまざまなモノにアクセスできることを示している。そして欲望や快楽に対するタブーに、挑戦しそれを廃棄するよう、我々はいわれる。欲望は常に刺激され、快楽は是とされる。いまは、毎日が祭なのだ。夢世界だつてどこにでもある。飲酒や賭博にしろ、社会はそれを奨励している。酒に強い、賭博に強い男(女も)は仕事もバリバリできそうだ。酒や賭博は我々を幸せにしてくれると、広告が教えてくれているではないか。

「生き生きした、即座の、孤立した、感情にみちた経験—強烈さ「が」強調された世界」(Featherstone 1991: 126)、こういった魅惑の世界で生き残るためには、より大きな自己コントロール、高いレベルのコントロールが必

要と、我々は吹き込まれる（Featherstone 1991: 126）。教えこまれた依存症者やイネイブラーはそれを懸命に実行しようと努める。

しかしストーン（Stone 1989）の指摘するように、内在的目標の代わりに外在的目標を追及することが命題となった我々の自己は、自律性と自由をかけたものである。欲望（あるいは我々の欲望と思いきまされているもの）は巨大な組織によって生みだされ、操作されている。多様性のなかの選択できる「自由」は、我々の手の届かないシステムによりコントロールされている。ホランド（Holland 1988: 412）が指摘するように「消費社会は、恒常的に即座の無限の欲求充足を約束するものの、『商品をお届けることは究極的には拒絶する……消費社会は、だれにも満足を約束するのに、だれも十分な満足を——消費を止めるほど——得ることはできない。』結局は裏切られる「無限の幸せ」の約束——依存症は大衆消費社会のロジックを忠実に反映したやまいであるといえよう。

社会的地位の不安定さ——自己防衛のストラテジーとしての依存症と現代社会

生理学的要因はさておき社会的にみて、依存症になりやすい人は、いるのだろうか。先に述べたように臨床例でみる限り、依存症を親（や祖父母）にもつ、いわゆるアダルト・チルドレンの事例は多々みられる。しかし例えば、病的賭博者（アメリカの事例）の職業をみた場合、医師、銀行員、会計士、弁護士、運転手、事務員、公務員、店員、無職などと多岐にわたっている。あらゆる社会階層に見出されるし、女性も男性同様、病的賭博者となりうる。人格特性についても、ある程度の共通性はみられるものの、賭博者のステレオタイプに一致した派手な人から地味でおとなしい人までいろいろである。

では社会構造のなかで依存症になりやすい位置をしめている人は、いるのだろうか。伝統社会での憑依を、劣勢な地位におかれた人たちの自己防衛、抵抗のストラテジー、弱者の力の表現とする見方がある。ルイスによると男性が権力を独占的に所有する社会では、社会構造の周辺にいる女性が、憑かれやすい。憑かれた女性は、儀礼で贅沢な贈り物（衣服、香水、ご馳走など）を夫に要求できる。他に抵抗する手段のない女性が憑キモノでもって男性と戦っていると、ルイスは解釈する（Lewis 1971）。これに対しウィルソン（Wilson 1967）は、憑依が女性同士の嫉妬や葛藤（例えば、一夫多妻家族のなかでの最初の妻と新しい妻）から生じることや男性のなかにも憑かれる人がいることに注目し、同性間の葛藤やより一般に地位の曖昧さに起因するとする。

地位の曖昧さというウィルソンの説は、ある意味ではルイス説をも含む解釈といえよう。男性と女性の世界に明確な境界があり、男性が圧倒的に権力を把握している社会では、女性は女性の世界に棲んでいる。自分の地位を脅かすのは他の女性であり、嫉妬や葛藤を身近に経験するのは、他の女性との関係においてであろう。たとえ権力を誇示する男性の存在に気付いているとしても。女性の社会進出が進んだ社会なら、他の女性あるいは男性双方との関係で、自らの不安定さを認識するであろう。

現代の依存症者も、社会的地位に葛藤なり不安を抱いている。アメリカの女性賭博者の事例では、四二人のうち（元）配偶者が病的賭博者である人が八人、アルコール依存症者が一人、薬物依存症者が四人、他の精神疾患が四人、女性問題のある夫が五人、仕事中毒が九人であった。もっとも夫にこれらのどの問題もない人も一人いた（Lesseur & Blume 1991）。夫や家族に問題があると、「母親失格」、「妻としての責任を果たさない」と責められるのは女性である。生まれた家庭での問題、結婚後の家庭での問題、こういった重要な人間関係の破綻か

ら逃れるため、賭博にはしるのかもしれない。そして「女だてらに賭博をして……」という自己に内在化した恥意識や世間の目に苛まれ、問題は悪化していく。

なかには「男並みに」、「男以上に」博打ができることで、女性である「劣性」から抜けでて力を誇示したい女性もいる。博打は伝統的に男の領域である。例えばポーカーといったまさに男の勝負で勝ち、男のごとく力を見せつけることで、喝采するのである。無力であることの恨みから、あるいは無力との闘いから、力のゲームの男らしさに魅せられ、それに囚われるといえる。女性の場合、夫の酒や賭博、女癖がきっかけで、「あんたがそうなら、私だって……」と賭博を始めた女性もいる。不安からの逃避だけでなく、現在の地位をそのまま受け入れることを拒み、力を望むより積極的な態度（男には負けない！）が、飲酒や賭博行為の動機にみられることもある。たとえそれが、裏目にでようと。男性の場合も、男らしさ（酒は飲んでも飲まれず、金にきれいな博打をして）に囚われた事例もあるが、ストレスや気疲れがきっかけとなっている「気配り」のききすぎる人もいる。

伝統社会では、人は親族の網の目のなかである程度確立した位置づけをもつことができた。現代社会では、人生のどこかで地位が曖昧となる時を人はもっている。それを考えると、依存症とは、たまたま不安定な地位に恒常的にいるか（例えばアダルト・チルドレンとよばれる人やいわゆる機能不全といわれる家族）いないかの相違はあっても、社会的には、誰でもなりうる疾患といえよう。ギデンズ（Giddens 1991, 1992）のいうように、日々くくくく変化する現代においては、その状況に対処しながら自己を調整すること、すなわち自己の再帰性が、重要となる。依存症は、「自己の再帰的形成という近代社会の重要課題の対局に位置する現象」（野口 1996: 175）ともいえよう。

自己は存在するのか、自己は自由で自律しているだろうか

まず最初の問いに対し、ここで示される答えは、ありふれた、常識的なものにみえるだろう。自助会の出席者は、想起した過去の出来事をつなぎあわせ語っているのだから、なにを想起しつなぎあわせるかで、語りが変わってくることもある。周りの人にとってはその人の自己についての語り（複数）であっても、しかし本人にとっては、その語りの時点では唯一、真実の語りである。語りによって構築された自己が、他の語りあるいは出来事によって、挑戦を受けることもあるかもしれない（家族の語り、再飲酒など）。しかし構築された自己が、うまく作用している（常識的な意味で社会のなかで、問題に対処しながら生活できる）なら、自己は存在した方がよいと私は思う。

次の問いに対し、回復した依存症者は、「そうだ」というであろう。プログラムは強制されたものではない。ただ示されただけのものである。プログラムを受け入れるかどうか、例会に出席するかどうかは、その人の自由である。自分が出席したいから、そうするのである。しかし、自己の全てを神（ハイヤーパワー）に委ねたとしても、それでも自己は自由で自律していると、いえるだろうか。12ステップという箱にはめただけと、批判する人もいるかもしれない。

道徳的な意味で、その人は自由で自律しているのかもしれない。しかしより本質的に、依存症者と依存症者を充たしてくれるモノとの閉鎖的關係に、他者が入り込んだとき、依存症者は、社会に存在することになったし、他者の視点で自分を見る開放性、そして自分の生き方を選択する自由を得たのではないだろうか。

参考文献

- Bateson, Gregory. 'The cybernetics of 'self'' *Psychiatry* 34, 1971.
- 井上 邦記 「自己」の心理学のホーケン・マックス 『精神の生態学』 岩波出版 1990 : 420-454
- Athens, L. Mead's Visions of the Self. *Studies in Symbolic Interaction*. Vol. 18 1995 : 245-261
- Berman, Linda & Mary-Ellen Siegel. *Behind the 8-Ball*. New York : Fireside/Parkside, 1992
- Blum, Kenneth, John G. Cull, Eric R. Braverman & David E. Comings. Reward Deficiency Syndrome. *American Scientist*. March-April, 1996
- Custer, R. L. & H. Milt. *When Luck Runs Out*. New York : New Facts on File Publications 1985
- Denzin, Norman K. *The Alcoholic Self*. Beverly Hills : Sage, 1986
- Denzin, Norman K. *The Alcoholic Society*. New Brunswick : Transaction Publisher, 1993
- Erdelyi, M. H. Dissociation, Defense, and the Unconscious. In *Dissociation : Culture, Mind, and Body*. Ed. D. Spiegel. American Psychiatric Press ; Washington, DC, 1994 : 3-20
- Featherstone, Mike. *Consumer Culture and Postmodernism*. London : Sage, 1991
- Fossum, M. & M. J. Mason. *Facing Shame*. W.N. Norton : New York, 1989
- Gambino, B. Fitzgerald, R. Shaffer, H. Renner, J. & P. Courtange. Perceived Family History of Problem Gambling and Scores on SOGS. *Journal of Gambling Studies*. Vol. 9 (2) : 169-184, 1993
- Giddens, A. *Modernity and Self-Identity*. Stanford : Stanford University Press 1991
- Giddens, A. *The Transformation of Intimacy*. Cambridge : Polity Press 1992
- 邦記 井上 邦記・松川昭子 訳 『親密性の変容』 而立書房 1995
- Goldschmidt, W. An Open Letter to Melford E. Spiro. *Ethos* Vol. 23(20) 1995 : 254
- Glass, James. M. *Shattered Selves*. Ithaca : Cornell University Press, 1993
- Holland, Eugene. Schizoanalysis : The Postmodern Contextualization of Psychoanalysis. In *Marrxism and the Interpre-*

- tation of Culture*. Urbana : University of Illinois Press, 1988
- Jordan, Jeff(ed.) *Gambling on God*. Lanham : Rowman&Littlefield, 1994
- Kanner, W. *I'm Dysfunctional, You're Dysfunctional*. New York : Addison-Wesley, 1992
- Lasch, Christopher. *The Culture of Narcissism*. New York : W. W. Norton, 1979
- Lesieur, Henry R. *The Chase*. Cambridge : Schenkman, 1984
- Lesieur, Henry R. & Sheila B. Blume. When Lady Luck Loses. *Feminist Perspectives on Addictions*. Nan Van Den Bergh Ed. New York : Springer, 1991
- Lewis, I. M. *Ecstatic Religion*. Harmondsworth : Penguin, 1971
- Lowry, Malcom. *Under the Volcano*. New York : Plun, 1971
- Maschio, Thomas. Narrative, Memory, and the Self in Southwestern New Britain. *Anthropology and Humanism*. Vol 20(2), 1995 : 98-116
- Maurer, Charles. Practical Issues and the Assessment of Pathological Gamblers in a Private Practice Setting. *Journal of Gambling Studies*. Vol. 10(1) 1994 : 5-20
- Mead, G. H. *Mind, Self, & Society*. Chicago : The University of Chicago Press, 1934
- Rugle, Loren J. Initial Thoughts on Viewing Pathological Gambling from a Physiological and Intrapsychic Structural Perspective. *Journal of Gambling Studies*. Vol. 9(1), 1993
- Schaeff, A. W. When society becomes an addict. New York : Harper & Row, 1987
- 麻酔 薬機科 講座 『聖薬と社会』 徳井豊隆 1993
- Schull, Natasha. Attached to the Machine. National Council on Problem Gambling 10th Annual Conference. 1996
- Spiro, M. Is the Western Conception of the Self "Peculiar" Within the Context of the World Cultures? *Ethos* Vol. 21(2), 1993 : 107-153
- Stone, Brad L. Modernity and the Narcissistic Self. *Studies in Symbolic Interaction*. Vol. 10 : 89-107, 1989

- Taylor, Charles. *Sources of the Self*. Cambridge : Harvard University Press, 1989
- Volpicelli, J. R. Uncontrollable Events and Alcohol Drinking. *British Journal of Addiction*, 82 : 381-392, 1987
- White, Michael & David Epston. *Narrative Means to Therapeutic Ends*. New York : W. W. Norton 1990
- Wilson, P. J. Status Ambiguity and Spirit Possession. *Man* (N. S.), 2 : 366-378, 1967
- 浅野智彦 「自己物語はどのように人をつかさどるか」 『現代社会理論研究』 四号 1994
- アンリオ、ジャック。『遊び』佐藤信夫訳 白水社 1986
- 伊藤智樹 「語り」の共同体 『現代社会理論研究』 六号 1996
- 『回復の道 PART II』 AA 日本出版局 1994
- グランジヤン、J. O. 『精神の遊び』 (Grandjouan, J. O. *Les jeux de l'esprit*, Paris, Editions du Scarabée) 1963、マンリオ 1986 に引用
- 野口裕二 『アルコホリズムの社会学』 日本評論社 1996
- 松島恵介 「しない私」と「した私」 『想起のフィールド』 新曜社 1996
- 森岡洋 『アルコール依存症を知る』 ASK 1989

注記

- ① 問題行動の医療化については、論議をよぶところのものであるが、ここでは現在自助会のメンバー一般に、受け入れられたラベルとして、依存症者（アディクト）という言葉を用いる。
- ② 西洋と非西洋の自己についての論争については、Spiro (1993) を参照されたい。
- ③ 自己と他者の境界を扱ったものについて、より専門的なものから一般的なものまであまりにも多く、出版されている。共依存や自助会の運動については、例えば *I'm Dysfunctional, You're Dysfunctional* (Kaminer 1992) を参照されたい。
- ④ 賭博、酒、（酒以外の）薬物など嗜癖（アディクション）にはさまざまななちがひがあり共通性がみられる。ここでは私の

経験からおもに酒と賭博への依存を念頭において、論をすすめる。私の経験とは、文献以外では、自助会や専門医療機関（日本、アメリカ）での観察をもとにしたものである。なおここでは、特定の事例は参照していない。

⑤ 酔いの間の記憶は、失われていることが多い。回復途上の人たちは、「浦島太郎」のようだと、話すことがある。

⑥ アルコールへの依存については、断酒会とAA（アルコホリックス・アノニマス）の二つの自助会が活動を行っている。その他の問題（賭博や薬物など）では、AAの原則によって作られた自助会、GA（キャンブラーズ・アノニマス）やNA（ナルコティックス・アノニマス）などがある。ここで、12ステップによって回復をめざすプログラムを取り上げたのは、筆者の熟知性による。

⑦ 語りは、心理療法の実際において重要な役割を果たしている（White & Epstein 1990 等参照）。例えば、アメリカの退役軍人病院（Cleveland）の依存症プログラムには、自分の生活史を他の患者や治療者の前で発表することが、重要な部分として組み込まれている。

⑧ 松島（1996）は、断酒会において「辛い体験を忘れ」ないように、とはいえ「それに耽溺し」ないように、出席者が過去の体験を『現在』にあらわれる『過去』として想起し語ると指摘する。

⑨ 自助会を「語り」の共同体としてとらえ、その相互作用を分析したものとしては、例えば伊藤（1996）を参照されたい。